

唐獅子と鹿児島由来

中央区・城山支部 西田橋小田原病院 | 小田原 良治

差出人「在麿加世田会」の封書が届いた。南さつま市物産展の案内が入っていたのだが、隣で仕事をしていた娘が、差出人を見て、「どこからの手紙なの」と聞いて来た。見慣れぬ字で不審に思ったのであろう。「『麿』という字は『げい』と読む。『鹿児島』という意味。鹿児島在住の加世田出身者の会ということだ」と説明し、「『麿』という字は最近使わないな。ザビエル公園にフランシスコ・ザビエルの石碑があるだろう、碑文にも『帯麿』と書いてあるよ。ザビエルが鹿児島にいたことを顕彰する記念碑だな。因みに、『麿』とは唐獅子のことだ」と話をした。それまで、あまり気にしたこともなかったのだが、考えてみると、『麿』という字を分解すると、『鹿兒』となる。『鹿兒島(鹿児島)』である。『獅子の住む島』か、これはいいなと考えていた。

ザビエル公園のそばを通りかかった時、「そうだ」と思いついて、逆光ではあったが光を

避けながら、ザビエル帯麿記念碑をスマホで撮影した(写真1,写真2)。これを機に、鹿児島由来の地名を確認しようと鹿児島県のホームページから鹿児島由来を検索してみた⁽¹⁾。「地名由来」の鹿児島由来の部分には次のような記載があった。「古くは桜島のことを鹿児島と呼んでいたという(薩摩・大隅半島に囲まれた島という意味か?)。鹿児島そのものの名由来は、野生の鹿の子が多く生息していたからとか、火山を意味するカグという言葉からとか、多くの水夫(かこ)が住んでいたからとか、さまざまな説がある。」これが公式見解のようである。

なんだ、つまらない。がっかりであった。鹿の子が沢山住んでいたと言っても、子鹿がずっと子鹿でいるはずがない。すぐに成長して親鹿になるだろう。水夫は鹿児島だけではなく、海辺なら、どこにでも住んでいるだろう。火山をカグと呼ぶということは知らな



写真1 ザビエル帯麿記念碑



写真2 ザビエル帯麿記念碑文

かった。鹿児島方言なのだろうか。「カグしま」が「かごしま」になったというのは、いかにもありそうな説明ではあるが、火山を「カグ」と呼んだというのは本当だろうか。硫黄の臭いを「嗅ぐ」だとすれば、いかにもこじつけに聞こえる。いずれにしても、薩摩島津 77 万石の城下町としては夢のない話だなどがっかりしたのである。

『麿』という字は『げい』又は『かのこ』と読む。たしかに『鹿の子』という意味もあるようである。しかし、『唐獅子』という意味がある。『唐獅子』は、唐から伝わったもので、神獣とされていた。仏教の守護獣である。虎や豹もかみ殺す猛獣とされ、『ライオン』のことだと思われる。『麿』を鹿の子とする記述は、三国志の英雄、曹操の子、曹丕の詩の中にあるようである。年代的には古い。しかし、この時代、日本は古墳時代であり、『麿』を鹿の子として鹿児島に伝わったとは考え難い。

鹿児島を『麿島』とする記載は、我が国では、『続日本紀』に見られるという。『続日本紀』淳仁天皇天平宝字 8 年（764）に、「12 月、西の方で声が聞こえた。雷の音に似ているようで雷ではない。その時、大隅国と薩摩国との堺にあって煙のような雲が空を覆って暗くなり、雷光がたびたび走った。7 日後に空ははれたが、『麿嶋』（鹿児島）の信爾村（しなむら：隼人町と推定）の海に、砂や石が自然に集まって何かを造っている状態のようであり、その島の地形が相連なっている様子を見ると、四阿の屋根に似ていた。島ができた時、埋没した民家は 62 区域で、人間は 80 人あまりであった。」⁽²⁾と『麿島』の名と桜島の爆発が記載されているようである。西暦 764 年は、日本は奈良時代、中国は唐の時代である。日本に仏教が伝えられ、広まっていった時代である。『唐獅子』の屏風絵も多く画かれるようになっていく。このことを考えれば、『麿島』は『獅子の島』とするのが妥当

なように思われる。

鹿児島のシンボルは、やはり桜島であろう。鹿児島は桜島という火山の国なのである。火を噴く島国に住んでいるのは『鹿の子』でもなく、『水夫』でもなく『獅子』が相応しい。鹿児島は熊襲の国であり、隼人の乱でも知られている隼人族の地でもある。ヤマト政権に対立した地であり、ヤマト政権に反逆した地でもある。薩摩島津は戦国時代を生き抜き、秀吉に臣従したとはいえ、領土を保全して生き残った。関ヶ原でも敵中突破をして生き残り、幕末には幕府を瓦解に導き、明治維新を成し遂げた。不幸なことではあったが、政府に物申すと腰を上げた西南戦争は、明治政府の心胆を寒からしめた。これらの気概と反骨精神を考えれば、鹿児島の地名のルーツは、『小鹿の住む島』でも、『水夫の住む島』でもなく、『獅子たちの住む島』が相応しいと酒を飲みながら考えている。

- (1) 鹿児島県ホームページ地名の由来
(<https://www.pref.kagoshima.jp/ab23/pr/gaiyou/rekishi/bunka/yurai.html>)
- (2) 現代語訳は、大穴持神社由緒 (<http://kamnavi.jp/en/kyuushu/oonamuti.htm>) を一部改変して引用